CARE World

Vol. 12 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter June 2009

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1-2 パキスタン新規事業
～地震被災地にて女子の未来に向けた教育支援

page 3 シエラレオネ滞在記

page 4 事務局からの報告
支援組織講演会報告／「東京発 日本ファッション・ウィーク」がCAREを支援／「アジアの祭典 チャリティーバザー」に出展／「アフリカン・フェスタ2009」に参加

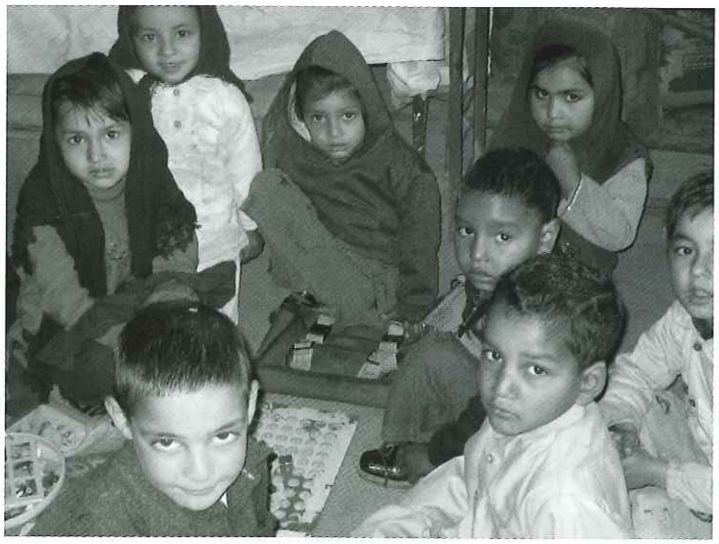
page 5 CSRフォーラム報告

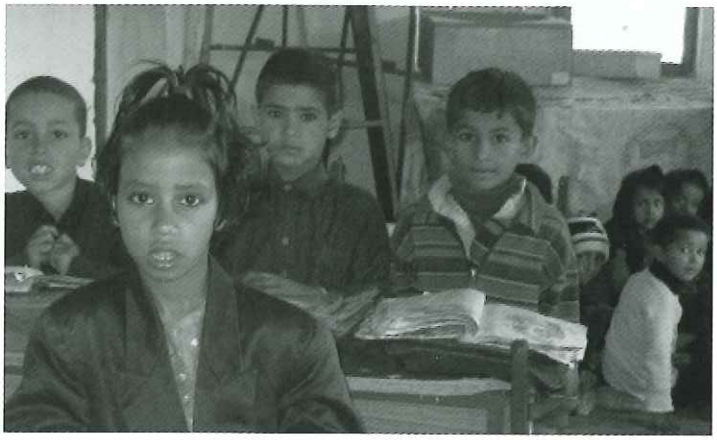
page 6-7 ベトナム「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」活動報告
私スタイルのCAREライフ

page 8 CAREストーリー
～サイクロン発生から1年。ミャンマー
CARE Notice Board

パキスタン新規事業

～地震被災地にて女子の未来に向けた教育支援





アボッタバッド県の学校で学ぶ子どもたち。入学者の名簿を見ると、男子に比べて女子が少ないことがわかる

教育の男女差

国際社会が 2000 年に設定したミレニアム開発目標の一つである「普遍的初等教育の達成」では、「2015 年までに、世界中のすべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」と記されています。なぜ、「男女の区別なく」とあるのでしょうか。日本では、男の子も女の子も小学校に通い、教育を受ける機会があります。しかし、世界には女の子が学校に行くことができない環境があります。国際協力機構（JICA）および株式会社ラッシュジャパンとの連携により、ケア・インターナショナル ジャパンがパキスタンで 2009 年 1 月から開始した「北西辺境州初等教育向上事業」は、この女子の教育問題に焦点を当てたものです。

パキスタン北西辺境州アボッタバッド県は、首都イスラマバードの北に位置し、2005 年 10 月に発生した地震で甚大な被害を受けたところです。教育省によると、2005 年の震災前にアボッタバッド県には公立小学校が 1,227 校あり、その 541 校が女子小学校でした。地震で約 800 校が損傷を受け、そのうち男子校 133 校と女子校 76 校が全壊しました。アボッタバッド県における成人男性の識字率は 74%、女性は 39%です。県内における都市部と地方の男性識字率の格差は著しいですが、女性においてはより大きな開きがあり、都市部では 64.7%、地方では 34.1%です。

パキスタン地方部が抱える教育問題

この事業の実施地域のようなパキスタン地方部では、①特に女性の識字率が低い、②教育へのアクセスが悪く就学年齢の子どもたち数百万人が学校に通っていない、③男女格差が大きく女子教育への理解が低い、④公立学校の教育の質が低い、など初等教育に関するさまざまな課題を抱えています。女子に教育を受けさせたいと思っている親もいますが、アクセスが悪く、遠い道のりを女の子一人で通学させることを不安に思い、親が女子を教育から遠ざけてしまっているのも事実です。これらの問題を解決するためには、教室やトイレの建設、机・椅子の提供などのハード面と教員育成やカリキュラム改善といったソフト面の支援を組み合わせた、根源的な解決を目指すための包括的アプローチが必要となります。

パキスタン地方部の教育制度のすべての局面において、女子は男子の陰に隠れています。貧しい家庭では特に、女子より男子の就学を優先します。女子の就学率の低さの要因には、経済的な障害以外に、女子教育に対する否定的な社会・文化的背景および政府やコミュニティの支援体制の不整備なども挙げられます。パキスタン地方部における教育へのアクセスの男女格差は、歴史に根づいている社会的通念や社会的構造（権力構造）から来ているとも言われます。そこで、女子が教育を受ける意義をこの事業の活動を通して伝えていく必要があります。

パキスタンは地方分権化に基づき、県教育局を中心とした教育体制になっていますが、体制が十分に整わない段階で、地震の影響を受けました。教育問題に責任を持つコミュニティのリーダーによるグループ（以下 PTC）は、学校の運営・管理を行うグループとして法律で制定されており、学校長の推薦に基づき教育局から任命されたメンバー（校長、教師代表、保護者会代表、コミュニティ代表、村長、宗教指導者などを含む）から成り立っています。しかし、PTC の責任と役割が周知されていないこと、また、メンバーに対する研修がほとんどないことから、十分に機能を果たしていません。また、親の教育に対する意識が低いことに加え、コミュニティの間で教育の質とアクセスの向上に果たす行政の役割や責任が理解されていないのが現状です。

活動内容

この事業では、北西辺境州アボッタバッド県アボッタバッド郡の 6 地区における 20 校で、コミュニティ（特に女性と女子）がフォーマル（学校教育）およびノンフォーマル教育（学校外での教育）に関する諸問題に対して自ら行動を起こせるよう力をつけることを目標としています。主な活動は、①PTC（20 組織）に対する能力向上のための研修の実施、②父母グループ（20 組織）の結成および能力向上のための研修の実施、③各 PTC とコミュニティの年次集会を通した連携強化、④教室内で教師と生徒をサポートするコミュニティ・ボランティアに対する研修の実施、⑤各 PTC と各父母グループの四半期会合の開催、⑥政府関係者を含めた年次教育会議を通した体制強化、⑦政府関係者を含めた事業終了時ワークショップの開催などです。

PTC のミーティングの風景。写真には男性しか写っていないが、メンバーには女性も含まれ、ミーティングなどにも参加する

生徒がすぐに直接的な恩恵を受けられる学校建設や奨学金などに国際社会からの支援は集中しがちです。しかし、父母やコミュニティの意識・能力の向上、教育関係者や政府との連携・体制強化など、「モノ」ではなく「人」に焦点を置いた長期的視野に立った活動とあわせて、包括的アプローチで支援を行うことでこそ、子どもたちに明るい未来がもたらされることは、CARE が世界中で行っている事業を通して実証されています。今後、子どもたちの人生における変化を随時報告していきたいと思います。

（事業部　武田 勝彦）

シエラレオネ滞在記

事業部インターン　相田 華絵

女性グループが地図を作成中。小枝が道を、葉っぱが家を表している

2009 年 1 月中旬から 3 月中旬までの約 2 カ月間、私はインターンとして、CARE シエラレオネにおいて HIV/ エイズ事業の視察と家族計画に関する社会調査に参加しました。

HIV/ エイズ事業

CARE シエラレオネでは、現地パートナー団体と連携し、トラック運転手、行商人、性産業従事者、若者などを対象にした HIV/ エイズ事業を実施しています。事業では、劇、ラジオ、CM、掲示板、ピアエデュケーション *1 などのさまざまなコミュニケーションチャンネルを通して、また、サッカー大会やダンスパーティといった人が集まる娯楽の場において、エイズに関する正しい情報を伝えることで、人々の行動変容を促すための働きかけを行っています。また、HIV 陽性者にラジオ番組に出演してもらったり、陽性者をゲストスピーカーとしてイベントに招待するなど、普段、公の場に姿を現す機会の少ない彼らの声を多くの人に届けることを通して、HIV 陽性者に対する偏見・差別をなくしていくための活動も行っています。

家族計画に関する社会調査

この調査は、家族計画や避妊法の低い利用率に関してどのような背景や障壁があるのかを探るために実施されました。シエラレオネの女性は生涯に平均 5 人の子どもを産みます。また何らかの避妊法を実施しているのは 8 %にすぎません。

なぜカップルは多くの子どもを望むのでしょうか。「成長する前に亡くなる子どもが多いから」「家計を助ける働き手は多いほうが良いから」「幸せの証拠だから」など、さまざまな理由を聞き取ることができました。また調査ではジェンダー *2 の問題が浮き彫りになりました。男女の役割に関して、「男性」は強くたくましく、家庭を導く存在であること、「女性」は夫に従順で家事をきちんとこなすことが期待されています。外出時は、夫は妻の許可なく自由に出られますが、妻は必ず夫の許可を得なければならない、子どもを何人持つかは夫が決めることであり、妻は口出しする権利を持たない……。

今回の調査で最も印象的だったのは、男女別のグループに分かれて住んでいるコミュニティの地図作りを行ったときでした。男性グループはマジックを使って模造紙に地図を描きましたが、女性グループは地図が何であるかを知らなかったため、まず地図の説明をする必要がありました。また、マジックの使い方がわからず、身近にある小枝や石、葉っぱで地図を描いてくれました。地図には、彼らがコミュニティの中で重要な資源だと考えるものを描いてもらいました。完成した地図にはモスク、水汲み場、集会所、診療所などが描かれましたが、女性グループの地図に「学校」はありませんでした。グループの女性全員が学校へ行ったことがなく、「学校」は彼女たちの生活に密接なものと考えられていないことが察せられました。

同時に、この地図作りを通して彼女たちのパワーを感じました。マジックの使い方を知らないから、「地図」を知らないから、学校に行っていないから、彼女たちは弱い存在として捉えられがちです。しかしそれは私たちの提案した「方法」を知らなかっただけであり、小枝や葉っぱを使って地図を描いてくれたように、彼女たちのやり方で、私たちの想像もつかないような素敵な地図を描くことができます。私のとらわれた概念を超えた彼女たちの内なるパワーを教えてくれました。

住む時代や地域によって社会から期待される男性／女性としての役割や価値は異なってくるものですが、社会・文化的な背景だけでなく、一人ひとりの個人に内在するパワーと、そのパワーを家庭・学校・職場などさまざまな関係性の中で個人がどのように表現していくかによっても大きな違いを生むことを実感しました。また私たちの生活の中でも、女性／男性だからと、暗黙のうちに制限されていることはたくさんあります。ジェンダーは途上国だけの問題ではなく、先進国に住む私たち一人ひとりにも深く関わる課題であることに気づかせてくれました。

*1　HIV/ エイズに関する研修を受けた者が「ピアエデュケーター」となり、同世代の仲間に HIV/ エイズに関する情報を伝えること。
*2　男女の生物学的性別ではなく、社会的価値観などによって規定された社会的性差のこと。男女の社会的・文化的役割の違いや男女間の関係性を示す。

●今回の記事には書かれていないシエラレオネの魅力が満載のブログは、当団体ホームページのトップページのバナーからご覧いただけます。ぜひお読みください。

事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織 講演会報告

ケア・フレンズ東京主催の講演会が2月21日に開催され、北大路欣也さんにご講演いただきました。幼少時代に俳優になりたいと決意されたときから、著名な俳優に成長するまで、そして最近のCMでの「白いお父さん犬」の声としてのご活躍についてお話くださいました。

4月11日には、ケア・フレンズ岡山主催の講演会が行われ、曽野綾子さんが世界各国におけるご自身の奉仕活動について語られました。アパルトヘイト時代の南ア、コンゴ、そしてボリビアでは、本当の「貧困」とは何か、「ボランティア」をすることはどういうことか、を考えさせられたことなど、とても示唆に富んだお話でした。

5月9日に開催されたケア・サポーターズクラブ熊本の講演会では、杉良太郎さんにお話いただきました。芸能界デビュー数年前から始められた刑務所慰問や世界各地の日本人墓地参拝など50年余りの奉仕活動に関するお話に来場者の方は熱心に耳を傾けていらっしゃいました。また、「お金」「時間」「理解や思い」の面で自分のできる形の奉仕をしてほしいと呼びかけてくださり、募金箱にはたくさんのご寄付が集まりました。

素晴らしい会を催してくださいました、ケア・フレンズおよびケア・サポーターズクラブの皆様に心からお礼を申し上げます。

HAPPY TOGETHER！ 日本版パリコレ「東京発　日本ファッション・ウィーク」がCAREを支援

展示会では、ARTする社会福祉施設「KOUBOUKAI」がデザインしたショッピングバッグや原画、オリジナルグッズなどとともに、ココン州のプロジェクトについてのパネルが展示されました

3月20日～29日、日本の優れた繊維・ファッションの製品およびサービスなどの情報を海外に発信することを目的として、第8回「東京発　日本ファッション・ウィーク（以下JFW）」が開催されました。この期間中、JFWと感度の高い一般消費者を抱える有力セレクトショップ*が一丸となって、「HAPPY TOGETHERプロジェクト」が行われました。

社会貢献の一環として、東京周辺の各ショップでの商品購入者に配布された特製ショッピングバッグ1枚あたり5円が、CAREのカンボジア「ココン州青年男女の能力向上プロジェクト」に寄付されると同時に、24日～26日の3日間限定で東京ミッドタウン・アトリウムにて、同プロジェクトを紹介する展示会が開催されました。各ショップでの商品購入を通じて、ココン州のプロジェクトをご支援いただいた多くの皆さまに心より感謝いたします。

*参加企業：（株）シップス、（株）トゥモローランド、（株）ナノ・ユニバース、（株）ビームス、（株）フリーズインターナショナル、ベイクルーズグループ、（株）ユナイテッドアローズ（五十音順）

「アジアの祭典　チャリティーバザー」に出展

横田評議員をはじめ多くの方のご支援により、4月15日に開催された「アジアの祭典　チャリティーバザー」に出展しました。厳しい経済情勢にもかかわらず、チャリティのためにと、大勢の方がご協力くださいました。心より感謝いたします。

「アフリカン・フェスタ2009」に参加しました

5月16日(土)、17日(日)に開港150周年で賑わう横浜赤レンガ倉庫・イベント広場にて、「アフリカン・フェスタ2009」が開催され、当団体もブースを出展しました。

アフリカ各国の大使館や60団体もの NGO が参加し、アフリカの伝統音楽ライブやワークショップ、ファッションショー、有識者によるトークショーやレクチャーなどが行われ、アフリカンフードコーナーが設置されるなど、横浜にいながらにして広くアフリカについて知ることができる2日間でした。

CAREブースでは、今年4月から開始した、レソトにおけるエイズ孤児や女性を対象とした栄養改善と農村開発事業および南部スーダンにおける帰還民と地域住民のための水と衛生改善事業についてのパネルを展示し、多くの来場者に新しいプロジェクトについて知っていただく絶好の機会となりました。またTシャツなどのオリジナルCAREグッズをはじめ、アフリカ各国からの民芸品も大変ご好評をいただきました。2日目にはあいにくの強風により、終了時刻が一時間早まってしまうというアクシデントにも見舞われましたが、当団体のアフリカでの活動を紹介することができた有意義な2日間でした。

ご来場いただきました皆さま、当日の運営にご協力いただきましたボランティアの皆さま、本当にありがとうございました。

CSRフォーラム「Strategic Philanthropy Forum 2009」報告

5月11日、新宿センタービル「大成建設大ホール」（東京・新宿）にて、環境・CSR コンサルティング会社である株式会社イースクエアとの共催で、「Strategic Philanthropy Forum 2009 ～ Cash＆Sales と Care＆Solidarity 両立の時代へ～」を開催しました。経済危機を抜け出したときに「選ばれ続ける強い企業・ブランド」になるための鍵、そして今の時代だからこそ行うべき企業の社会貢献の形を模索する企業の経営者や CSR・社会貢献担当者を中心に、NGO やメディア関係者など、約 230 人に参加いただきました。

まず株式会社イースクエア代表取締役社長、そして当団体理事でもあるピーター D. ピーダーセンによる基調講演の後、CARE フランス事務局長フィリップ・レヴェックが、CARE のグローバルな企業パートナーシップ事例を紹介しました。ユニリーバやバータ社との連携による BOP（Bottom of the Pyramid）ビジネス関連の取り組み、ソシエテ ジェネラルとの協働による社員参加型プロジェクト、ラファージュとの協働による本社および途上国での HIV 関連の取り組み、スターバックスとのコーヒー生産地における協働など、日本での実例が少ない分野における海外の先進事例を紹介しながら、各社との交渉経緯や関係構築までのステップ、そして途上国における成果や協働の課題などについて話しました。

当団体の国内協働事例としては、ワイデン＋ケネディトウキョウのアカウントディレクター、橋本ゆかり氏が「専門性を生かす社員参加型社会貢献～マルチパートナーシップによる『pro bono* work』」と題して、寄付サイト「care ギフト」開発にあたっての事例を発表、続いて、日本ファンドレージング協会の常務理事である鵜尾雅隆氏が「コーズ・リレーティッド・マーケティング（CRM）を通じた商品及び企業価値の向上～丸紅とヤマノビューティメイトの事例」と題して、二つの事例から見える CRM 成功のポイントなどを発表しました。そして最後に、各登壇者と会場の参加者によるオープンフロアディスカッションが行われ、フォーラムを締めくくりました。

今回のフォーラムは、企画や告知など準備段階からのイースクエア社員の方のご協力をはじめ、会場提供いただいた企業様、展示パネルを作成いただいたデザイナーの佐藤よし子様など、多くの皆様にご協力いただきました。また当日は、スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社の社員の皆さまによる休憩時のコーヒーサービスに加え、株式会社オルタナ様からは環境と社会貢献と「志」のビジネス情報誌「オルタナ」を、丸紅株式会社様からは CRM 事例としてのブラボーバナナをそれぞれご提供いただくと共に、株式会社リンガバンクの横田謙様、原田ゆかり様にはプロボノで通訳いただくなど、フォーラム自体が、CARE と企業 / 専門家による連携によって実現しました。この場を借りて、多大なるご協力ならびにご支援をいただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

●当日の発表資料については、当団体ホームページ「企業パートナーシップ」のページよりダウンロードいただけます。

*「pro bono（プロボノ）」とは、ラテン語で「善のため」という意味。そもそもは弁護士が無報酬または低報酬で行う公共的・共益的な活動を指したが、現在は業種を問わず広く使われている。「ボランティア」と異なる点は、「専門的」な知識や経験を、無報酬で提供するという点である。

CAREフランス事務局長フィリップ・レヴェック、来日

CARE フランス事務局長
フィリップ・レヴェック

当団体は、CSR フォーラムのために来日した CARE フランス事務局長フィリップ・レヴェックとフランス系企業訪問などを行うとともに、5 月 13 日には、日本経団連内にある社団法人 海外事業活動関連協議会（CBCC）主催の懇談会にて、異なる業種・業態の会員企業の皆さまと意見交換を行いました。

また、昨年「ミャンマー・サイクロン早期回復のための農業支援事業」を通じてご支援いただいたソニー株式会社様主催の CSR フォーラムにて、フィリップならびに当団体事務局長が講演、異なる部署からご参加いただいた約 100 人の社員の皆さまに対して、CARE のグローバルな企業パートナーシップ事例に加えて、ミャンマーにおける支援活動の報告などを行いました。

ベトナム
「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」活動報告

ケア・インターナショナル ジャパンは、ベトナム政府よりカントー橋の建設を受注した大成・鹿島・新日本製鐵共同企業体(TKN)の支援を受け、2006年から約2年間にわたり、建設労働者を主な対象としたHIV/エイズ予防事業を実施しました。

さらに、2008年11月以降、引き続きTKNの支援を受け、今度はコミュニティの人々を主な対象とした「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」を実施し、2009年4月に終了しました。ここでは、この事業を行うに至った背景と活動の成果について報告いたします。

■背景

ベトナムはHIV感染者の増加が著しい国の一つとされています。カントー市でも近年の経済発展と社会環境の変化により人々の移動・移住の機会が増加したため、HIV感染率が増加傾向にあります。

2008年のカントー市のHIV感染率は0.3%ですが、HIV陽性者の半数以上は、20～29歳の若年層、そして男性が3分の2を占めます。これは、カントー市の経済活発化と同時に、労働者数や娯楽施設が増加し、注射器による薬物使用者、性産業従事者、その顧客など、HIV感染リスクの高い行為にかかわる若年層が増加したことに関連します。

さらに近年は、これらのHIV感染リスクの高いグループのみではなく、HIV陽性の夫から妻、そして母から子どもへというように、家族内のHIV感染の増加も確認されています。

また、ベトナム全体およびカントー市においては、HIV陽性者に対する偏見や差別が強く、そういった社会の否定的な態度により、HIV陽性者や家族が適切な医療や社会サービスを受けられないという状況もあります。HIV陽性者に対するケアの充実は、陽性者の人権保障の観点、そして新たな感染予防の観点からも重要です。そのため、偏見や差別の撤廃を目指す活動もHIV感染予防活動と同時に行っていく必要があります。

■活動の成果

このような背景から、ベトナム現地事務所およびカントー市のエイズ予防センターと協力して、HIV感染のリスクと予防に関する地域住民や若者の意識を高めると同時に、HIV陽性者に対する偏見や差別を軽減することを目指して、以下の活動を実施しました。

① HIV予防を促す漫画ブックレットとHIV/エイズ法についてのブックレットを作成。
② 路上キャンペーンを実施し、地域住民、学生、地方行政官などに6000個のコンドームを配布。
③ 意識向上を目的とした音楽・ドラマ・ファッションショーなどのイベントを4回実施し、1500名以上が参加。
④ 娯楽施設の経営者に対し、HIV予防を促すための研修を2回実施し、40名以上が参加。
⑤ 工場・建設現場の労働者と喫茶店の客を対象としたHIV予防を促す啓発セミナーを3回実施し、380名が参加。

イベント、研修、セミナーなどに参加した青年、地域住民、娯楽施設の経営者からは、「このようなHIV予防を促すイベントやセミナーの実施はとても重要であり、また参加したい」との声が聞かれました。また、「音楽やファッションショーもイベントに含めることで、堅苦しくない雰囲気の中でHIVについての知識を得られることがとても効果的で楽しいので、またこういったイベントを開催して欲しい」といった要望も出されました。

さらに、「イベントに参加する前は、HIV陽性者の隣に座ったり、握手するのが怖かったし、HIVが感染するのではないかと心配だったが、それが間違いだったと感じる。今は、HIV陽性者と握手するのも怖くないし、同僚として一緒に働くこともできる」といった感想も聞かれ、HIV陽性者への偏見や差別が軽減されてきていることが確認されています。

この事業は、2009年4月末をもって終了しましたが、今後は、地域がHIVについての理解を深め、HIV陽性者に対する偏見や差別のない環境が持続されるよう、現地事務所が中心となって引き続き活動を行っていく予定です。

（事業部　尾立 素子）

エイズに対する意識向上を目的とした音楽イベント

娯楽施設の経営者に対する研修風景

私スタイルのCAREライフ

CARE ボランティアメンバー
田中 李歩

5月に横浜で開催されたアフリカン・フェスタ2009にて。アフリカのレソトを象徴するバソトハットをかぶり、ンデベレ族の人形を手にして写真撮影！（中央が筆者）

いつも楽しく、得るものたくさん！

私が CARE のボランティアに登録したのは、高校 1 年生の冬です。幼い頃から外国への憧れは強かったのですが、飛行機に乗ったこともない自分と海外とのつながりを見出せないまま高校生になりました。そんな中、学校で偶然ジェンダーについて学び、女性の教育は特に開発途上地域で重要なのだと知って、私の世界への漠然とした憧れは国際協力への興味に変わりました。せっかく興味を持ったからには何かしてみたい、国際協力を身近に感じてみたいと思い、私にもできることはないか探していたところ、CARE の週末ボランティアに出会いました。CARE のホームページを読んで、支援する人々の力を引き出すという方針や女性・子どものエンパワーメントが重点になっていることにひかれたので、すぐにここでボランティアを！ とメールを送っていました。

これまでに、アースデイ東京、アフリカン・フェスタといったイベントや路上でのリーフレット配布活動に参加させていただいています。イベントは活気に溢れていてたくさん刺激を受けています。リーフレット配布は大規模ではないですが、CARE について、国際協力について、さまざまな人に興味を持っていただくチャンスだと思っています。

CARE での活動を通して、スタッフの方やインターンの方、他のボランティアの方とお話できるのが、私にとっての喜びです。普通では行かないような珍しい国を実際に訪れた方の感想や NGO の現地活動の様子を会話の中で自然に聞けるのは、本当に貴重なことで、遠いと思っていた世界に少しずつ近づけているような気がします。いつも楽しく、得るものたくさん！ それが私にとっての CARE ボランティアです。

CARE ボランティアに参加することで、教育だけではなく、女性の地位やエイズなどの問題についても関心を持つようになり、将来はできるだけじかにそういった分野に携わりたいと思うようになりました。具体的な職業はまだあまり考えていませんが、CARE スタッフの皆さんがとても素敵なので、NGO の職員にも憧れています。まずは教養と語学力をしっかり身につけ、見識のある人間になることが当面の目標です。

今年は受験生ですが、大学生になったらもっともっと CARE に関わっていきたいです。これからもよろしくお願いします！

週末の JR 品川駅前にて、ほかのボランティアさんと積極的に配布活動に関わってくださる田中さん

CARE World

Vol. 12 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter June 2009

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1-2 パキスタン新規事業
～地震被災地にて女子の未来に向けた教育支援

page 3 シエラレオネ滞在記

page 4 事務局からの報告
支援組織講演会報告／「東京発 日本ファッション・ウィーク」がCAREを支援／「アジアの祭典 チャリティーバザー」に出展／「アフリカン・フェスタ2009」に参加

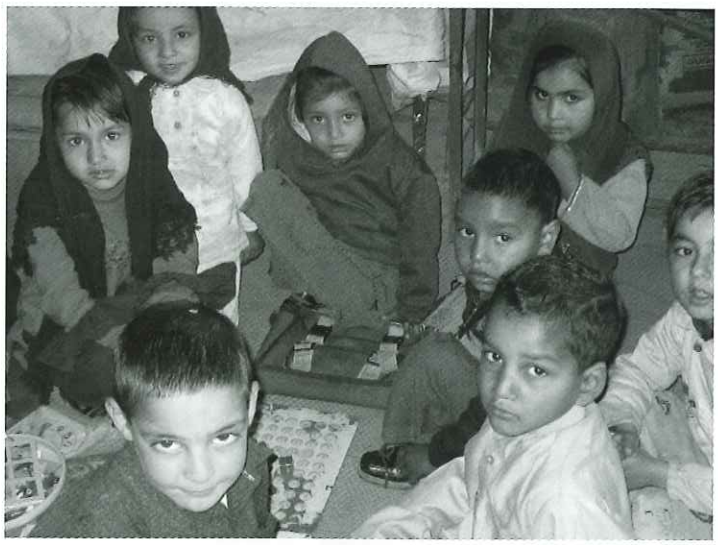
page 5 CSRフォーラム報告

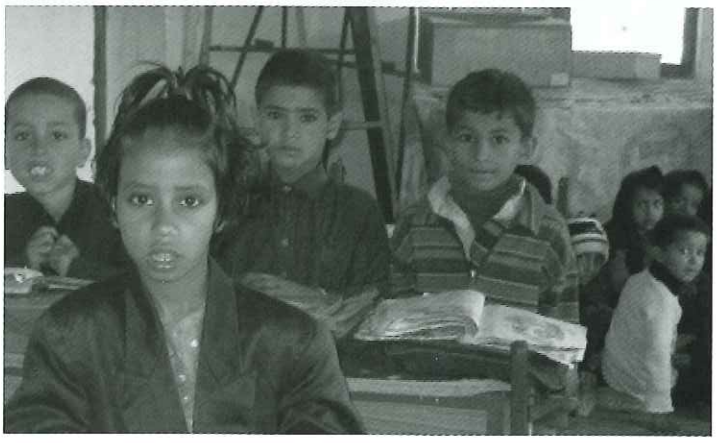
page 6-7 ベトナム「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」活動報告
私スタイルのCAREライフ

page 8 CAREストーリー
～サイクロン発生から1年。ミャンマー
CARE Notice Board

パキスタン新規事業

～地震被災地にて女子の未来に向けた教育支援





アボッタバッド県の学校で学ぶ子どもたち。入学者の名簿を見ると、男子に比べて女子が少ないことがわかる

教育の男女差

国際社会が 2000 年に設定したミレニアム開発目標の一つである「普遍的初等教育の達成」では、「2015 年までに、世界中のすべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」と記されています。なぜ、「男女の区別なく」とあるのでしょうか。日本では、男の子も女の子も小学校に通い、教育を受ける機会があります。しかし、世界には女の子が学校に行くことができない環境があります。国際協力機構（JICA）および株式会社ラッシュジャパンとの連携により、ケア・インターナショナル ジャパンがパキスタンで 2009 年 1 月から開始した「北西辺境州初等教育向上事業」は、この女子の教育問題に焦点を当てたものです。

パキスタン北西辺境州アボッタバッド県は、首都イスラマバードの北に位置し、2005 年 10 月に発生した地震で甚大な被害を受けたところです。教育省によると、2005 年の震災前にアボッタバッド県には公立小学校が 1,227 校あり、その 541 校が女子小学校でした。地震で約 800 校が損傷を受け、そのうち男子校 133 校と女子校 76 校が全壊しました。アボッタバッド県における成人男性の識字率は 74%、女性は 39%です。県内における都市部と地方の男性識字率の格差は著しいですが、女性においてはより大きな開きがあり、都市部では 64.7%、地方では 34.1%です。